セリック ケナン・麻生 玲子・中澤 光平（2021）『言語記述論集』13：139-177

明治期の八重山語の語彙資料『海南諸島單語篇』*

セリック・ケナン
国立国語研究所・kcelik@ninjal.ac.jp
麻生玲子
名桜大学・r.aso@meio-u.ac.jp
中澤光平
東京大学・kohein@l.u-tokyo.ac.jp
キーワード：八重山語、語彙資料、明治時代、田代安定

本稿では、明治期の八重山語（石垣島方言）の語彙資料の手書き原稿の翻刻を提示する。『海南諸島單語篇』（副題『沖縄懸下八重山島單語』）と題する本資料は植物学者の田代安定が 1880 年代に実施した実地調査に基づいて作成したもので、現在、東京大学理学図書館で保管されている。この資料は収録語数が 800 語を超えており、また、表記が八重山語の重要な音韻的対立を反映している。このように、八重山語の纏まった正確な語彙資料として最古のものであると考えられる。このため、八重山語の研究および研究史にとって極めて重要な価値がある。

1 はじめに

先島諸島で話される南琉球諸語は書き言葉を持たず、それを書き留めた歴史的な文献がほとんど存在しない。そのため、南琉球諸語の古い時代の言語状態を知る際は、比較言語学・歴史言語学の手法によって導き出される推定に頼らざるを得ないが、比較方法を用いて過去に起こったであろう言語変化を特定できても、これらの変化が生起した絶対的な年代付けは困難である。八重山語諸方言のまとまった（相対的に）古い文献としては、1930 年に出た『八重山語彙』(宮良 1930) が琉球諸語の記述研究の分野ではよく知られているものの、この文献で伺い知ることができるのは、せいぜい数代前の八重山語の姿である[1]。

先島諸語に関するより古い文献を調べると、宮古語の親族語彙を報告する論文 (田代 1888) や、八重山語と日本語が同系統であることを論じる論文 (田代 1894) が出てくる。この 2 本の論文の著者は田代安定という植物学者で、1880 年代（明治 10 年代）に数回に渡って八重山の現地調査を行った人物である (齊藤 2006, 中生 2011)。調査内容は言語に限らないが、1894 年の論文では八重山の言語について「20 冊余り」の報告書を東京大学に提出していることを明記している。そして、この報告書は現存しており、先行研究では保管場所の情報と共に明確に言

* 本研究は MEXT 科研費 19H05353、JSPS 科研費 19K13174 の助成を受けたものです。本稿の執筆にあたり、古本氏から有益なコメントを多くいただきました。感謝を申し上げます。

[1] 現在、八重山諸方言を流暢に話せるのはおよそ 1920 年代から 1930 年代までに生まれた世代なので、現在研究されている八重山語は言語習得がおよそ 1950 年代までに完了した話者の言葉である。

及されている (三木 1980, 齊藤 2006)。しかし驚くことに、琉球諸語の研究分野ではこれまで全く知られてこなかった。

『海南諸島單語篇』と題する本報告書は、1880 年代の八重山語の語彙資料である。約 800 語を収録し、音韻的対立を正確に反映しているという点で量的にも質的にも優れている。さらに、八重山語の詳細かつ正確な語彙資料としておそらく最古のものであると考えられる。どのような話者を調査したか記録からは読み取れないが、明治期以前に言語習得した話者の言語状態が記されている可能性があり、このため、極めて貴重な資料であると言える。1 点しか存在せず、20 世紀以降、現在までの琉球諸語に関する先行研究で言及されてこなかったことから、今後の琉球諸語研究に資する資料として本稿では『海南諸島單語篇』に関する簡単な解説を述べた後、翻刻を提示する。

2 田代安定と八重山の調査

本節では田代安定（タシロ　アンテイ／ヤスサダ、1857 – 1928）の生涯と彼の八重山調査履歴について、三木 (1980)、齊藤 (2006)、中生 (2011)、國吉 (2012)、名越 (2017) を参考に簡単に紹介する。

2.1 田代安定（年表）

- □ 1857（安政 4）年： 現在の鹿児島県鹿児島市加治屋町に生まれる。
- □ 1869（明治 2）年： フランス語学者の柴田圭三に師事。
- □ 1872（明治 5）年： 薩摩藩の藩校の造士館に入学、フランス語の助教も兼ねる。
- □ 1874（明治 7）年： 上京し、田中芳男のもとで植物学を学ぶ。その翌年から当時の内務省管轄の博物館掛として勤務。
- □ 1881（明治 14）年：奄美大島と沖縄諸島での植物調査を農商務省から依頼される。
- □ 1885（明治 18）年：八重山の長期的調査が始まる。
- □ 1886（明治 19）年：12 月より八重山の再度の長期的調査が始まる。
- □ 1888（明治 21）年：帝国大学に『海南諸島調査書』の報告書を提出。
- □ 1895（明治 28）年：台湾での仕事を命ぜられる（1924 年まで続く）。
- □ 1928（昭和 3）年： 71 歳で逝去。

2.2 田代安定の沖縄及び八重山調査

田代安定の沖縄および八重山の調査の概要を簡単に述べる。田代は、農商務省の依頼により、1881（明治 14）年に奄美大島、1882（明治 15）年に沖縄で調査を行った。1882 年の調査の際には八重山まで足を延ばしたようであるが、八重山の詳細な調査につながった直接的な出来事は 1884（明治 17）年のことである。ロシアのペテルブルグで開催された園芸博覧会に参加した帰り、ヨーロッパを走るの汽車の中で「フランスが先島諸島を領土とする予定である」という話を乗客から聞いたことによる。この話に危機感を覚えた田代は、帰国直後に先島の海防に関する建議書を提出した。これによって、翌年から 1 年半の八重山での（基礎）調査を命じられ、

1885（明治 18）年 7 月から翌年の 5 月まで八重山に滞在し八重山諸島に関する調査を行った。調査は多岐にわたり、各島実地測量をはじめ、炭脈調査、戸籍調査、地理調査、山林調査、貢租制度調査、村吏旧慣制度調査、旧慣諸例規調査、諸風俗習慣調査、史跡上の諸考証探査、業務上に於ける諸調査、物産調査、農業調査、マラリアに関する調査を実施・報告し、さらに植民開拓上に於ける目途予定、将来殖産興業上に関する目途についても報告している。

その後、1886（明治 19）年 12 月から翌年の 12 月まで今度は人類学と植物調査の依頼を受け、帝国大学の調査員として再度八重山に渡航し調査を行い、後に報告書を帝国大学に提出している。この報告書は『海南諸島調査書』と称しており、様々な内容を扱う複数の原稿からなっている。その中で『海南諸島單語篇』（副題は『沖縄懸下八重山島單語』）という題で八重山語の語彙集を収めた成果が含まれている。この語彙集自体には日付の記載が見られないが、田代は報告書の目録を東京帝国大学の総長に 1888（明治 21）年の 7 月に渡していることが分かっている (三木 1980:110) ので、1888 年のものであることが分かる（なお、同『海南諸島調査書』の『沖縄縣取調附圖』には「明治廿一年七月一日」の記載がある）。

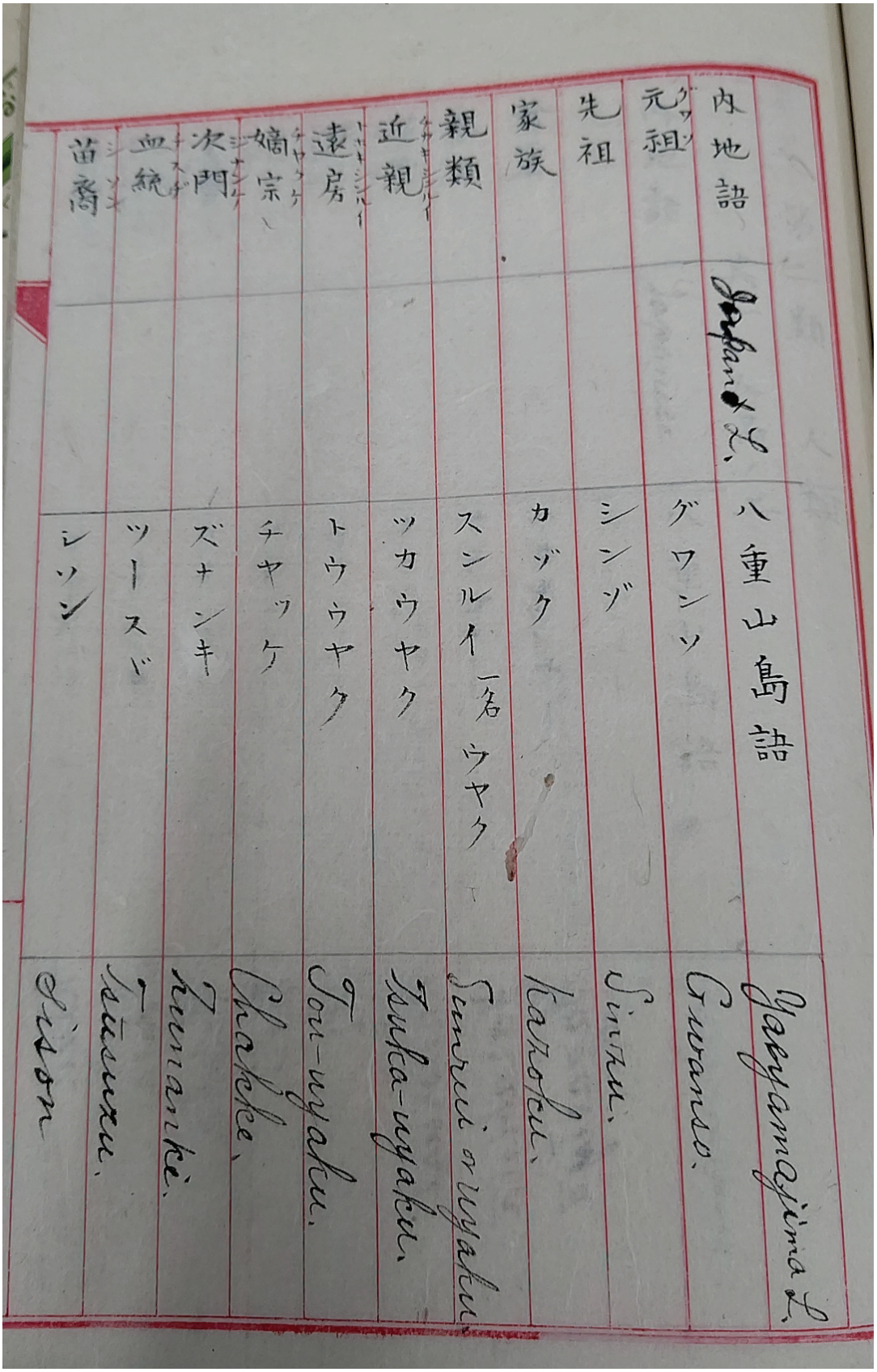
その後、田代は八重山の言語と宗教を扱った論文を『東京人類學會雑誌』で発表しており、その中で八重山の言語について 20 冊もの報告書を提出していることを明記している[2]。それにも拘らず、管見の限り、本資料は後の琉球諸語の研究分野で一度も取り上げられたことがない。例えば、琉球諸語に関する研究の文献リストを網羅的に集めた平山 (1983) では『東京人類學會雑誌』で発表された田代の一連の論文は列挙されているものの、『海南諸島單語篇』はリストから外れている。

3 『海南諸島單語篇』の語彙資料

3.1 資料概要

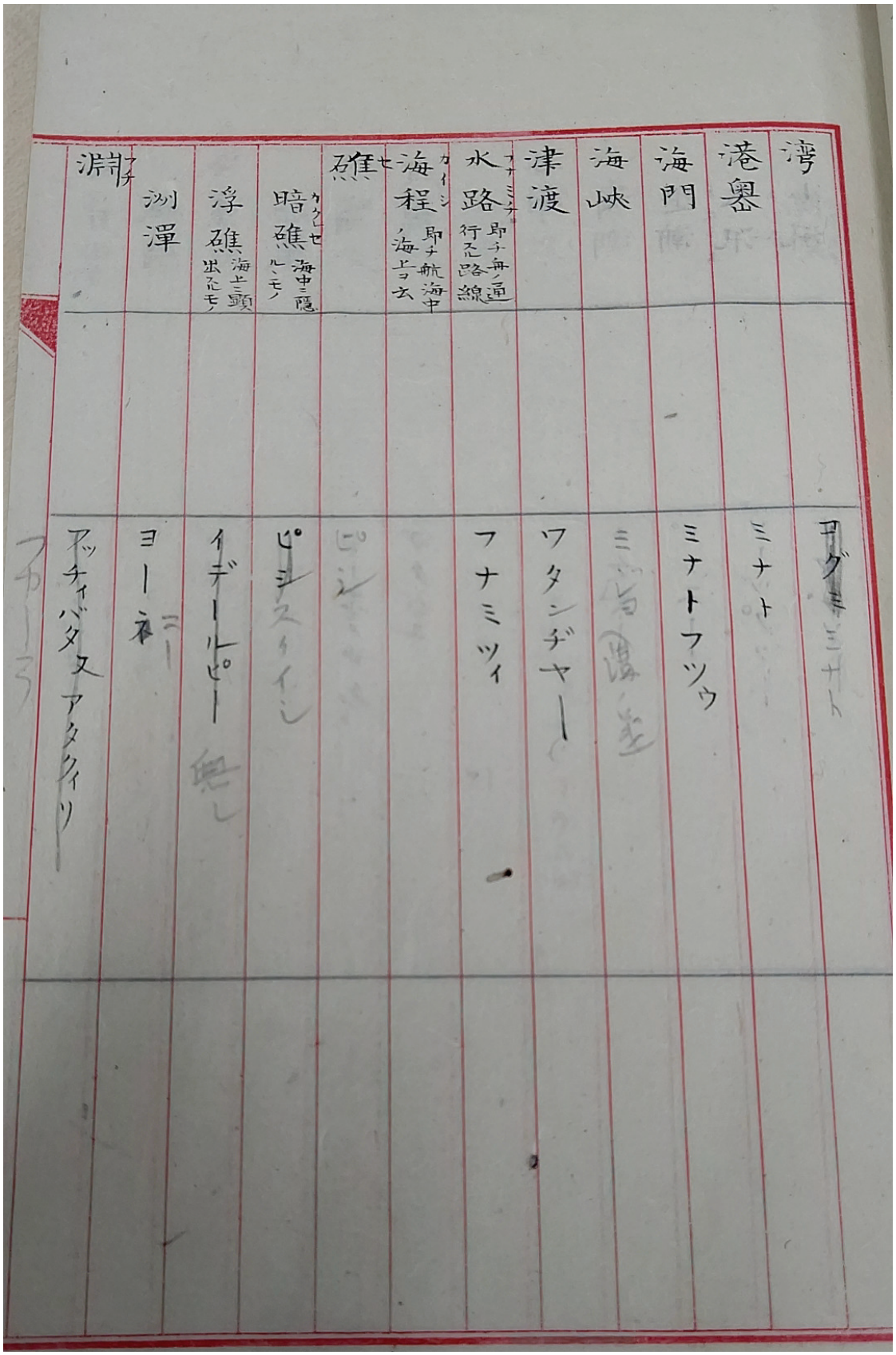
『海南諸島單語篇』は縦 25 ㎝の 1 冊の和綴じ本の形態を取っており、表紙を含めておよそ 100 頁から成る。縦書きの手書き原稿である。下の図 1と図 2で確認できるように、原稿の大部分がインクで書かれているが、鉛筆による修正や追加が処々に見られる。

[2] 「言語ノ㋐ハ予か編纂スル所ノ書類二十餘册帝國大學人類學教室ニ藏メアレバ」(田代 1894:230)。



内地語	八重山島語	Yaeyamajima.
元祖（グワンソ）	グワンソ	Guwanso.
先祖	シンゾ	Sinzu.
家族	カゾク	Kazoku.
親類（シンルイ）	スンルイ 一名 ウヤク	Sunrui or uyaku
近親（キンシンルイ）	ツカウヤク	Tsuka-uyaku.
遠房（トウバウシンルイ）	トウウヤク	Tou-uyaku.
嫡宗（チヤクソウ）	チヤッケ	Chakke.
次門（シモンル）	ズナンキ	Zunanki.
血統（チスジ）	ツースド	Tsūsudu.
苗裔（ビヤウエイ）	シソン	Sison

図1　ローマ字入り頁例



湾	コグミ
港湾	ミナト
海門	ミナトフツウ
海峡	ミナト
津渡	ワタンヂヤー
水路（フナミチ）即チ舟ノ通行スル路線	フナミツイ
海程（カイテイ）即チ航海中ノ海ヲ云	
礁（セキショウ）	ピシ
暗礁（アンセキ）海中ニ隠レタモノ	ピシスイシ
浮礁 海ニ顕ハレタモノ	イデールピー
洲潭	ヨーネ
泝（ソ）ナ	アッティバタ又アタティリ

図2　鉛筆訂正入り頁例

各頁は横線によって縦 4 段に分かれている。それぞれの段には上から順に「内地語」「Japanese L.」「八重山島語」「Yaeyamajima L.」の名称が与えられている（図 1）。最上段に日本語の項目が記され、3 段目にはその項目に対する八重山語の片仮名表記が記されている。日本語の項目には 2 種類あり、すなわち、行頭から始まる本項目と、それに関連する、1 字下げた下位項目が区別されている。所によっては、最下段に八重山語のローマ字表記も記入されている。2 段目は原稿全体に渡って空となっているが、段の名称から日本語の項目のローマ字表記を入れる予定があったと推測される。それに加えて、幾つかの項目に対して簡潔な備考が記されている。語彙は品詞と意味分類によって整理されている。使用されている分類範疇を(1)に示す。

(1)　分類範疇（出現順番）

	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
a.	實名詞	第二門天地部	第一類天文	其一
b.				其二歳時
c.			第二類地理	其三海陸
d.				其三居處
e.	實名詞	第一門人倫部	第一類家倫	其一家族
f.			第二類	其一人品の上
g.	形容詞	普通形容詞	雑部	

調査の概要や話者の情報が記されていないので、田代がどの方言を書き記したのかが分からない（または複数の方言を報告している可能性も考えられる）。しかし、本資料で記されている語形は石垣島で話されている現在の方言とよく一致している。図 3に「虹」と「男」の例を挙げる（紺碧色のラベルは本資料と完全一致する語形である）[3]。そのため、本資料で収録されている方言は石垣島の方言であると推測できる。田代自身は「八重山語」すなわち「八重山諸島で話される言葉」ではなく、「八重山島語」すなわち「八重山島、すなわち石垣島で話される言葉」と記入していることもこの推測を支持する。そして、石垣島の方言であるとすると、権威が最も高く、島の中心部で話される方言が記述の対象となったと考えられるので、本資料で収められている方言は石垣四箇（しか）方言であると推測される。

最後に、資料の量について簡単に述べておく。『海南諸島單語篇』では合計 819 点の日本語の項目に対して、829 点の八重山語の語形が収録されている（1 つの項目に対して複数の語形が収録されていることや、八重山語の語形が記されていない項目も存在する）。語数としては纏まっている資料だと言えるが、（後の震災の影響などで）元の報告書の大部分が散逸・消失している可能性が高い。なぜなら、2.2節で触れたように、田代は八重山語の報告書を「20 冊余り」も提出したと明記しているほか、彼が提出した目録の中に「海南諸島単語篇（十一冊内訳は宮古、八

[3] 語彙データは戦前編集された『八重山語彙』(宮良 1930) による。それに加えて、石垣 (2013)、セリック・ケナンほか (2021)、西岡 (2000)、加治工 (2020)、仲原 (2004)、加治工 (1998)、前大 (2002)、中川・セリック (2020)、与那国方言辞典編集委員会 (2019) と LAJ136・LAJ259 のデータも使用した。語形を IPA 表記で統一した。

図3　八重山諸方言における「虹」と「男」

重山、沖縄、奄美の各人倫身体部名詞および天地歳時部名詞などである」とされているからである (三木 1980:110)[4]。論文の中で「20 冊余り」としているのは『海南諸島調査書』全体の冊数を指していると思われるが、目録からすると東京大学で保管されている資料は『海南諸島單語篇』の一部でしかないことが明らかである。第一に、奄美、沖縄、宮古に関する語彙が全く見られない。第二に、身体に関する語彙がない。第三に、分類の番号を追ってみると明らかに欠けている分類範疇がある。例えば、「第二類地理」はいきなり「其三海陸」から始まっており、また、その次の分類は同じ番号の「其三居處」となっている。「其三居處」はおそらく、異なる類または門の分類であると考えられるが、その分類が見当たらない。このように、東京大学に提出された報告書の一部が散逸または消失していると考えざるをえない。東京大学の資料は複数の冊子を 1 冊に纏めたものであろうが、提出された冊子がそれぞれ 20 頁であったと低く見積もっても、語彙に関する元の報告書は 220 頁にも及んでいたことになる。つまり、現在東京大学で保管されている資料は元の報告書の 2 分の 1 以下に過ぎない可能性がある。報告書の一部しか伝わっていない原因については関東大震災などが挙げられる。

3.2 資料の表記について

『海南諸島單語篇』の詳細な分析は別稿に譲るが、本資料の解読を助けるため、使用される表記の主な特徴について簡単に述べる。

現在の石垣方言は a、i、u、e、o、ɨ、ɵ の 7 つの母音を有している (宮城 2003)[5]。a、i、u、e、o は日本語の a、i、u、e、o とおおよそ同じであり、[tu]・[ti] などの音節を除いてこれらの母音を片仮名で書き表すのには別段問題がない。しかし、それに対して、ɨ は日本語にない母音であるため、それに対応しうる片仮名がなく、そのまま書き表すことができない[6]。表 1に示すように、田代はこの ɨ の母音に対して様々な工夫をしてそれをを正確に書き表そうとしている。なお、ɨ が含まれる音節に対して「ズ」を添えることがあるが、これは摩擦噪音を伴う音声的な実現（すなわち「プズィ」[pᶻɨ]・「グィズ」[gᶻɨ]）を表そうとしているためであると考えられる。

続いて、/rɨ/の音節に対して「ルヽ」の表記が見られるが、これはラ行の震え音としての音声的な実現を表していると思われる(2)。平山 (1988:694-695) で指摘されているように、現代の石垣方言でも/rɨ/の音節は子音が強い顫動を伴う発音がよく観察されており、田代の観察と全く一致している。震え音がきちんと記されていることは田代安定の観察の鋭さを物語っている。

(2) a. モルヽ [murɨ]「岡」
b. アールヽ [aːrɨ]「東」

最後に、多くの項目の書き起こしの中に「、」という記号が使われている。(3)で分かるように、この記号は形態素や文節の境界を示していると思われる（例では対応する現代石垣方言の語形

[4] 八重山だけではなく、奄美、沖縄と宮古の語彙も収録されていたとすれば、報告書の題名に選択された「海南諸島」の用語も納得がいく。ちなみに、他のテーマに関する報告書も宮古、沖縄なども扱っている。
[5] 本稿では宮城 (2003) の表記法に従うが、ï と ë の代わりに ɨ と ɵ を使用する。なお、音韻表記を / / で示す。
[6] ë は ɨ 終わりの語の主題形にしか現れないため、ここでは問題にならない。

表1　『海南諸島單語篇』における ɨ の表記

音節	表記	表記例	現代石垣方言（音韻表記）	
/pɨ/	プィ	プィーゴト	/pɨːgutu/	「火事」
	ピィ	ピィト	/pɨtu/	「人」
	プズィ	プズィ	/pɨː/	「火」
/mɨ/	ムィ	ウムィ	/umɨ/	「海」
/tsɨ/	ツィ	マツィヤマ	/matsɨjama/	「松林」
/dzɨ/	ズィ	パナレズィマ	/panarisɨma/	「離島」
/sɨ/	スィ	ニスィ	/nisɨ/	「北」
/rɨ/	リィ	ピイトリィモノ	/pɨturɨmunu/	「一人者」
/kɨ/	クィ	テンゥクィ	/tiɴkɨ/	「天気」
	クィゥ	ツクィゥ	/tsɨkɨ/	「月」
	クゥイ	バガ、ツクゥィ	/bagatsɨkɨ/	「新月」
/gɨ/	グィ	ホーグィボス	/poːgɨbusɨ/	「箒星」
	グィズ	モーグィズ	/moːgɨ/	「虹」

を示している）。つまり、田代は単に語形を調査しただけではなく、形態的な分析まで行っていたことが窺える。

(3)　a.　ガスィ、ドシ　/gasɨdusɨ/「凶年」＜ /gasɨ/「餓死」＋ /tusɨ/「年」
　　b.　スサ、ナム　/sɨsanaɴ/「白波」＜ /sɨsa/「白い」＋ /naɴ/「波」
　　c.　ボドドイノ、ストモデ　/bududuinu sɨtumudi/「一昨日の朝」

3.3 翻刻凡例

翻刻の基本的な方針は次の通りである。

- 原本の順番通りに翻刻を行った。
- インクで書かれたものは黒で記し、鉛筆で書かれたものを灰色で記した。
- 訂正箇所、すなわち削られた箇所を打消し線（「~~ツクィ~~」）で示した。
- 本項目は行頭から掲載し、下位項目は 1 文字下げて掲載した。
- 備考は［　］に入れて示した。
- 判読できなかった文字を □ の記号で示した。
- 片仮名表記に関して、当時の日本語の表記法に則って拗音（「キャ」「チャ」の「ャ」等）または補助文字（/kɨ/ を表す「くぃズ」の「ぃズ」等）が大きく書かれることがある。本原稿では、周辺の文字の大きさと比較して、できる限り原稿の大きさに従って翻刻を行った。
- 原文の明らかな誤字で、翻刻の間違いでない箇所を [sic] で示した。

3.4 **翻刻**

（表紙）

八重山列島天地歳時部名詞

海南諸島單語篇

（次次ページ）

實名詞部天地門

沖繩懸下八重山島言語篇

（次次ページ）

沖繩懸下八重山島言語篇

田代安定　編集

實名詞

第二門　天地部

第一類　天文

其一

内地語	八重山島語
天	テン
天氣	テンゥクィ
晴天	イー、テンゥクィ　又
	セー、テン
曇天	フムィル、テンゥクィ
雨天	アマ、テンゥクィ　又
	ウッテン
日即チ太陽	テダ
旭日（アサヒ）	アサァ、テダ
落日（ユウヒ）	イル、テダ
日光（ヒノヒカリ）	テダノピカル
日影（ヒカゲ）	テダノカイ
月即チ太陰	ツクィゥ　又
	テダノサナ
新月	ミカ、ヅクゥィ

	バガ、ツクゥィ
半月	ファン、ツィクィ
望月	マル、ツィクィ
月光	ツクィノ、ピカル
月影	ツクィノ、カイ
日暈	~~ツクィ~~テダノ、サナ
月暈	ツクィノサナ
日蝕	テダノヤホ　［日ノ（災難）ノ義］
月蝕	ツクィノヤホ　［月ノ災難ノ義］
星（ホシ）	プスィ
彗星（ホゝキボシ）	ホーグィボス
銀河（アマノガハラ）	ツィンカーラ
雲	ホモ
霧（キリ）	クィリユ
霞（カスミ）	クィリュ
ユウヤケ	ユーネンヤクィ
アサヤケ	アサヤクィ
雷	カンナル
電	プリー
虹（ニジ）	モーグィズ
雨	アミ
梅雨（ツユ）	ナガアミ
霪雨（ナガアメ）	ナガアミ
細雨	
大雨	ウプ、アミ
驟雨（ニワカアメ）	アタアミ　又
	ニワカノアミ
風	カズィ
順風	ジユンプー
逆風	ムカウ、カズイ
涼風	スダ、カズィ
寒風	ピーサ、カズィ
暴風	アラ、カズィ
大風	タイフー
四飆（ツジカゼ）	イノー、カズィ
東風	アール、カズィ
西風	イール、カズィ

南風	パイ、カズィ
北風	ニスィ、カズィ
煙	キ~~ム~~ブル丶
露（ツユ）	チユー
霰（アラレ）	ユクィ　［雪ノ義］
霜	［(此語無シ)］
雪	［(同前)］
氷	［(同前)］
影　即チ物影	カイ
暗（クラヤミ）	フファサ
明	アカル
方位	ホーガク
四方	シポー
東	アール丶
西	イール丶
南	パイ
北	ニスィ
乾（イヌ井）	~~カーラグ~~イン井
艮（ウシトラ）	ウシトラ
巽（タツミ）	タツミ
坤（ヒツジサル）	ピツシサル

其二　歳時

内地語	八重山島語
季候	パダモツ
寒	ピーシャ
暑	アッツア
温	ニフサ
涼	スダゝサ
乾	カーラグ
湿	~~シ~~スメル丶
四節	シ丶ツ
春	ファル
夏	ナツ
秋	アクィ
冬	フユ

正月	シヨングワツ
二月	ニングワツ
三月	サングワツ
四月	シングワツ
五月	ゴングワツ
六月	ロクングワツ
七月	シツングワツ
八月	ハツングワツ
九月	クングワツ
十月	ジユーングワツ
十一月	ジユー、イチン、グワツ
十二月	ジユーニン、グワツ
潤月	ウルツクヒ　又
	ヨル、ツクヒ
月初即チ上旬	ツクィ、ファジメ
月半即チ中旬	ツクィ、ナカ
月未 [sic] 即チ下旬	ツクィ、スィー
去月	イクダ、ツクィ
来月	タ、ツクィ
毎月	マイ、ヅクィ
隔月	ツクィ、ヘダテ
今月	コン、ツクィ
年	トス
終歳　即チ一年中	ネンチユー
毎年	マイトスィ　又
	トシドシ
隔年	ピトトスィゴシ　又
	イチニンゴシ
今年	コトス
昨年	コズゥ
一昨年	ミーテナテ
一作々年	ヨーテナテ
來年	エーン
來々年	メー（前）、サン（三）子（年）ン
先年	~~セ~~シン子ン　［士族］
往昔（ムカシ）	ムカシ
太古	ヲホムカシ~~又ムカシ~~

豊年	ヨガホードシ
凶年	ガスィ、ドシ
日	ピー
今日	キウ
昨日	キヌー
一昨日	ボドドイ
大前日（サキヲトヽ）	ヨーカナテ
明日	~~ヨノーレ~~アツツア
明後日	アスト
明後々日	メー、ヨーカ
先日	コノーレ
毎日	マイ、ニツィ
隔日	ピトィゴス
終日	イツィ、ニチ
半日	パンニツイ
翌日	アツツア
翌々日	アサッテ
長日	ナーサールピニツィ
短日	インツカサールピニツィ
吉日	イーピニツィ
凶日	ヤナピニツィ
朔日	ツイタツィ
晦日	サーンジユーニツ
元日	グワンニツ
除日	トスィノピー　又
	トスィノユー
祭日	マツルヽビー
日数	プィカズィ
朝	ストモデ
早朝	ストモデ
暁天（アカツキ）	アカツク
日出時	テダノアガロール、トクィ
今朝	キウストモデ
明朝	アッチヤノストモデ
明後朝	アストノストモデ
昨朝	クィノ、ストモデ
一昨朝	ボドドイノ、ストモデ

毎朝	ストメテゴト　又
	マイアサ
隔朝	
昼（ヒル）	ピ~~ズ~~ール
昼間	ピー~~ローマ~~ルー[7]
上午即チ十一時	ヨツスン[8]
正午即チ十二時	コヽノツ、ジブン
下午即チ一時	ピローマ
午際（ヒルジブン）	ピローマズィブン
日昳（ヒルノヤツ）即チ十二時	ヤツジブン
中晡（ナヽツトキ）即チ三時	ナヽヅィジブン
黄昏	~~ヨ子ーン~~
日没時	ピニツィノイルジブン
薄募 [sic]	ヨーイルジブン
夕	ユ~~ニ~~子ーン
今夕	キウノ、ユニーン
昨夕	アツア、ユニーン
一昨夕	アストノ、ユニーン
明夕	アツアーノヨー
明後夕	アストノ、ヨー
夜	ヨール
夜半即チ深夜	ヤファン　又
	ヨナカ
終夜	ヨーヂユー
今夜	キユーノヨー　又
	ニッカ
昨夜	ユベー
一昨夜	キヌノヨー
明夜	アツアノヨー
明後夜	アストノ、ヨー
翌晩	ナーアツアノ、ヨル
翌々晩	ナーアストノヨー
毎夜	マイヨル
隔夜	ピトヨーゴス

[7] 「ルー」は「ルヽ」にも見える。
[8] 次の項目からすると、「ヨツジブン」の誤りと思われる。

夜間	ヨーヂユー	
暗夜	ヤミノヨー	
明夜	アツアノヨー	
時	トクィ	
一時間	ピトトクィ	
半時	パントクヒ	
小半時		
暫時	イットクィ　又	
	アターサマ	
先刻	クィサ	
只今	タバイマ　又	
	ナマ	
後刻（ノチホド）	アトカラ	
刻下（ヲツヽケ）	ヤガテ	
一日	ツイタチ	
二日	フツカ	
三日	ヲメッカ	mekka
四日	ヨッカ	
五日	イツカ	
六日	ムイカ	
七日	ナンカ	
八日	ヤウカ	
九日	コヽノカ	
十日	トウカ	
十一日	ジウイツィ　又	
	トッカピトイ	［下等］
十二日	シウヰニ　又	
	トツカフツカ	
十三日	シウサン　又	
	トッカミズカ	
十四日	シウシ　又	
	トッカヨーカ	
十五日	シウンゴニツイ　又	
	トカイツカ	
十六日	㊐㊐シウロクニ　又	
	トッカムイカ	
十七日	シウシチニツィ　又	

	トッカナンカ
十八日	シウパチニツィ　又
	トッカヤウカ
十九日	トッカコヽノカ　又
	シウクニツィ
廿日	パツカ
廿一日	ニシウイツィ　又
	パツカピトイ
廿二日	同　又
	パツカフツカ
廿三日	同　又
	パツカムイカ
廿四日	同
	パツカヨーカ
廿五日	ニシウゴニツィ
	同
廿六日	ニシウロク
	同
廿七日	同
	同
廿八日	同
	同
廿九日	同
	同
卅日	サンシウニツィ
卅一日	サンシウイチニツィ
四十日	同　又
	スンジウニツイ
五十日	同　又
	ゴンシウニツィ
六十日	同
七十日	
八十日	
九十日	同　又
	クンジウニツィ
百日	ヒャクニツィ　又
	ピャークニツィ

百一日	又	
	ピャークヒトイ	
百二日		
貳百日		
三百日		
甲乙	クゥークゥー	
	~~キイ~~、キイ	Kwū Kwū
丙丁		piwū piwu
戊巳	ツチツチ	tutwu tutwu
庚辛	カ子カ子	Kane Kane
壬癸	ミヅィミヅィ	Midsu Midsu
子	子ー	gni ~~gni~~
丑	ウシ	wusu
寅	トラ	tora
卯		wū
辰	~~ツィタツ~~	tatu
巳	~~フツカ~~	Mivvu
午	~~ミーズカ~~	nma
未	~~ヨーカ~~	pitsu
申	~~イツカ~~	sarru
酉	~~ムイカ~~	torru
戌	~~ナヌカ~~	yin
亥	~~ヤウカ~~	bizuu

第二類　地理

其三　海陸

内地語	八重山島語
地	ヅィー
陸	リク　又
	アゲ
世界	シカイ
天下	テンガスィタ
國	クニ
島	スィマ
巨島	ヲフズィマ
小島	ゴマスィマ

洲嶼	パナレズィマ
海	~~ウ~~ンムィ　又
沖	~~ヲホウムィ~~ヲキ　又
	ヲキヅィ
内海	ウツゥウムィ
太洋	ダイカイ　又
	ヲホウムィ
海面	ウムィノ、ウイ
海底	ウムィノ、スク
淺海	アサ、ウムィ
深海	フカ、ウムィ
泥海	ドル、ウムィ
砂海	イノーウムィ　又
	スナウムィ
江	［無し］
湾	~~ヨグミ~~ミナト
港嶴	ミナト
海門	ミナトフツゥ[9]
海峡	ミジョ　［（溝ノ義）］
津渡	ワタンヂヤー
水路（フナミチ）即チ舟ノ通行スル路線	フナミツィ
海程（カイシ）即チ航海中ノ海上ヲ云	
礁（セ）	ピシ
暗礁（カクレセ）海中ニ隠ルヽモノ	~~ピシ~~スィイシ
浮礁海上ニ顕出スルモノ	~~イテールピー~~無シ
洲渾	ヨー~~ネ~~ニー
淵（フチ）	~~フッチィバタ又アタクィサ~~フカーラ
海岸	ウミノパタ
磯碕	
海濵	パマ
砂濵	
洲嘴	ヨー子ノサクィ
汀潟	ガタバル
海潮	
満潮	ンチスー

9 「港口」。

退潮	ピシスー
大汛（オホシホ）	ソーヅプソー
小汛（コシホ）	ナマレソー
潮候（シホドキ）	スードクィ
波濤（ナミ）	ナムィ
平波	トレウムイ　又
	ナダカウムィ
微波	ゴマナミ
風波	アラナミ
狂浪	ヲホナミ
逆浪	ゴボレナムィ
白浪	スサ、ナム
飛瀾	ナムィノパナ
波響	ナムィノヲト
海嘯（ツナミ）	
水	ミヅゥ
清水	カイシヤルミヅ　又
	アマミヅ
濁水	ニゴリミヅ
泥水	ドルミヅ
鹹水	ソーミヅ
冷水	ピー、ミツ
流水	
潴水（タマリミツ）	タマルミズィ
泉源	モト
川口	カワラノフチ
川	カーラ
砂川	イノーガーラ
泥川	ドルガーラ
渓川	イザーカーラ
溝渠（ミゾ）	
沼澤	
瀑布	サーラ、ミズィ
池	
堤塘	
井　即チ井水	カー
深井	フカ、カー

淺井	
清水井	アマミヅ、カ－
鹹井	ソーミヅ、カー
涸井	ウリ、カー
廃井	ステ、カー
涸井	ピス、カー
洞孔地底ニ深ク凹陥スルモノ	イザー
岩窟地上ニアル洞窟ヲ云	ガマ
山	ヤマ
深山	フカヤマ
大山	ウホ、ヤマ
小山	コヤマ　又 ハヤマ
岩山	イシヤマ
高山	タカヤマ
峯嶽	
山巓	ツヅ
山麓	サンノシタ
山腹	サンノナカバ
森	ヤマ　［海南諸島森林共ニ「ヤマ」（山）ト總稱シ別ニ山森林ノ三物ヲ區別スルノ語ヲ用ヒス故ニ「ヤマ」と云フトキハ専ラ林ニ當ル］
林即山林	ヤマ
雑木林	ゾーキヤマ
松林	マツィヤマ
竹林	タケヤマ
仕立林	シタテヤマ
村林	ムラヤマ
岡陵即チ阜丘ヲ総テ云フ	モルヽ
高陵	タカモル
草丘	
石岡	
原野	ノバル
平原	ピスノー
曠原即廣野	ピロバル
砂原	イノーノー
荒蕪	アラノー
土地	ヂー

平地	ピスィチ
高地	タカヅィ
低地	ヒクヂー
湿地	シタルヂー
乾地	カーラヂー
砂地	イノーヂー
泥地	ドルヅィ
石地	イシヤラヅィ
肥壌（コヘヂ）	
瘠地	パグィヂー
土	ツソ　又
	ンタ
壌土	サパ、ンタ
粘土	モツィ、ンタ　~~又イーンタ~~
肥土	
瘠土	ヤナ、ンタ
砂	イノー、ンタ
坂（サカ）	サカ　又
	フィラ
高坂（タカキサカ）	タカフィラ
險坂（ケワシイサカ）	サカフィラ
嶺（トウゲ）	
谿谷	ヤマノフタナカ
矼橋（ハシ）	パシ
塹濠（ホリ）	
道路	
大道	
小逕	
山路	
坦道	
險道	
田地　即水田	
肥田	
瘠田	
阡陌（アゼ）	
塩田	
隴圃（ハタケ）	

薯圃	
菜圃	
粟圃	
麥圃	
廃圃	
宅園（ウチバタケ）	
牧場	マキ
火	プズィ
炭火	タン
燃火	モエビ
憐火	マヅ[10]ムノヽプイ　キジモナービゥキィナ
火事	プィーゴト
灰	パイ
木灰	タン
石灰	~~ウ~~ウールノパイ
煤	スヽ
炭	タン
木炭	
石炭	イシタン
塵芥	フク~~日~~イ　［(ホコリノ冂也)］

其三　居處

内地語	八重山語
城	グスク
城跡	グスクアト
城壁	
嘹哨（トヲミ）[11]	
公署（ヤクショ）	
厥倉（ヲクラ）	
村役所	バンショ
訟嶽	コヽメ
牓札（セイサツ）	パイフダ（張札ノ義[sic]
寺	テラ

[10] 「ゾ」のようにも見える。
[11] 第一字の字体が少し異なるが、入力可能な文字に置き換えた。

祠堂	
拜殿	
神祠	
弟宅（ヤシキ）	
別荘	パタケヤー
假宅	~~ヤーバイ~~
本宅	
家屋	ヤー
大厦	
小屋	
美屋	
陋屋	
瓦屋	カーラヤー
茆屋	ガヤブキ　又 ガヤヤー
倉庫	
本房	
厨房	
正房	
便房	
子舎（ネヤ）	
窩裡（ヲシイレ）	
子亭（ベツヤ）	

（表紙）

八重山列島人倫身體部名詞

海南諸島單語篇

（次次ページ）

實名詞　人倫部

沖縄懸下八重山島言語篇

（次次ページ）

沖縄懸下八重山島言語篇

田代安定　編輯

實名詞

第一門　人倫部

第一類　家倫

其一　家族

内地語 Japanese	八重山島語	Yaeyamajima L.
人（ヒト）	ピィト[12]	Pito.
男（ヲトコ）	ビギドン	Bigidon
女（ヲンナ）	ミードン	Mīdon
親（ヲヤ）	ウヤ	Uya
両親（リョウシン）	フタウヤ	Futa-uya.
継親（マヽヲヤ）	マヽヲヤ	Mama-oya.
亡親（シニタルヲヤ）	スンダウヤ	Sunda-oya.
父（チヽ）	シウー	Shiū.
養親（ヤウフ）	ヤスナイビ~~ギ~~ケヱー	Yasunai-bikē.
継父（マヽチヽ）即チ母ノ入夫	マヽビ~~ギ~~ケヱー	Mama-bikē.
義父（ヲヤブン）		
母（ハヽ）	アッパ	Appa.
	［一名］ブネー	

[12] 現代石垣方言は/pitu/。「ピィ」は pɨ の音節を表していると推測されるが、適切な記号がなかったからか、ローマ字の表記は pi のままである。

養母（ヤウボ）	ヤスナイブネー	Yasunai-bunē.
継母（マヽハヽ）	マヽブネー	Mama-bunē.
子（コ）	ク	Ku.
實子	ナジッホァー	
養子（ヤウシ）	ヤスナイホアー	Yasunai-hoā.
継子（マヽコ）	マヽホアー	Mama-hoā.
私生兒（カクレゴ）	グンボー	
男子（ヲトコノコ）	ビギドンホアー	Bigidon-hoā.
嫡子（チアクシ）	チヤクス	Chiakusu.
次子	ズナン	Zunan
三男	サンナン	San-nan
季子	ナスッキルリィト書スナラン］	Nasskuiri. ［記スル克ハス文字は生ミ切
女子（ヲンナノコ）	ミドンホアー	Midon-hoā.
孫（マゴ）	マー	Mā.
曾孫（ヒマゴ）	ボタマー	Bota-mā.
玄孫（ヒヽマゴ）	ミィーマー	Mi.
祖父（ヂヾ）	ウシュマイ	Ushumai.
祖母（バヾ）	ンミー	Nmī.
曾祖父（ヒヂヾ）	ウホウショマイ	N[sic]houshumai.
曾祖母（ヒバヾ）	ウホンミー	Uhonmī.
高祖父（ヒヽヂヾ）	ウホウショマイ	Uho-ushomai.
諸父（ヲヂ）即チ「ヲヂ」ノ総称ニテ伯父其他ヲ含ム		
	ボジヤ	Boja
従王父（オホヲヂ）	ウホヾジヤ	
伯父（ソウリウヲヂ）	ウホヾジヤ	Uho-bojɨya.
叔父（ツギノヲヂ）	ウホヾジャ	Uho-bojɨya.
季父（スヘノヲヂ）	ボジャーマ	Bojɨāma.
伯叔母（ヲバ）	ボバ	Boba.
従王母（オホヲヂヨメ）	ウホボバ	
伯母（ソウリウヲバ）	ウホヾバ	Uho-boba.
叔母（ツギノヲバ）	ウホヾバ	Uho-boba.
季母（スヘノヲバ）	ボバーマ	Bo-bāma.
兄弟（ケウダイ）	ケウダイ	~~K□u~~Kīodai.
姉妹（ヲンナケウダイ）	ボナリィィ	Bonar~~u~~ri.
兄（アニ）	アニ	Ani.
長兄（カシラアニ）	シヂヤ	Shijia.

仲兄（ナカアニ）	ナカッチヤ	Nakat~~su~~cha
季兄（スヘノアニ）	シジアーマ	Shij~~i~~āma.
姉（アネ）	アンマ	Anma.
長姉（カシラアネ）	ウホアンマ	Uho-anma.
仲姉（ナカノアネ）	ナカアンマ	Naka-anma.
季姉（スエノアネ）	アンマーマ	A~~m~~nmāma.
弟（ヲトヲト）	ヲトヽ	Ototo.
長弟（カシラノヲトヲト）	シヾヤヲトヽ	Shij~~i~~a-ototo.
仲弟（ナカノヲトヲト）	ナカヲトヽ	Naka-ototo.
季弟（スヘノヲトヲト）	ヲトヾウーマ	Otodo-ūma.
妹（イモト）	ヲトヽボナル゛リィ	Ototobonar~~u~~ri.
長妹	ヲトヽボナル゛リィ	Ototobonar~~u~~ri.
仲妹	ヲトヽボナル゛リィ	Ototobonar~~u~~ri.
季妹	ヲトヽボナル゛リィ	Ototobonar~~u~~ri.
従兄弟（イトコ）	イチユク	Ichuku.
再従兄弟（フタイトコ）	フタイチユク	Futa-ichuku.
三従兄弟	ミイヽチユク	Mi-ichuku.
従姉妹（ヲンナイトコ）	ミードンイチユク	Mīdon-ichuku.
再従姉妹（フタヲンナイトコ）	フタイチユク	Futa-ichuku.
三従姉妹（ミヲンナイトコ）	ミーイチユク	Mi-ichuku
甥（ヲイ）	ボイ	Boi.
姪（メイ）	ボイ	Boi.
夫婦（フウフ）	ホーフ	Hōfu.
夫（ヲツト）	ボド	~~Boto~~Bodo
先夫（マヘノヲツト）	サギボト	
亡夫（ナキヲツト）	スンダボド	Sunda-bodo.
後夫（ノチノヲツト）		
妻	トヅ	Todu
先妻（サキノサイ）	サギェトヅ	Sagi-todu.
亡妻（ナキツマ）	スンダトヅ	Sunda-todu.
後妻（ノチノツマ）	アトヽヅ　又 マタトヅ	~~No~~Ato-todu.
舅（シウト）	~~シ~~ストウヤ	Sh~~i~~uto-uya
姑（シウトメ）	~~シ~~ストウヤ	Sh~~i~~uto-uya
岳父（妻ノ父）	同	"
兵 [sic] 母（妻ノ母）	同	"
小舅（コシウト）	ストパラ	

小姑（コシウトメ）	ストパラ	
嫂（アニヨメ）	ヤンマー	Yanmā.
嬸（ヲトヽヨメ）	ヤンマーマ	Yanmāma.
婿（ムコ）	ムク	Muku.
新郎（ハナムコ）	ミィムク	
婦（ヨメ）	ヨメ	Yome.
新婦（ハナヨメ）	アイナマ	

内地語 Japan日 L.	八重山島語	Yaeyamajima L.
元祖（グワソ）	グワンソ	Gwanso.
先祖	シンゾ	Sinzu.
家族	カゾク	Kazoku.
親類	スンルイ	Sunrui or
	［一名］ウヤク	uyaku
近親（チカキシンルイ）	ツカウヤク	Tsuka-uyaku.
遠房（トホキシンルイ）	トウウヤク	Tou-uyaku.
嫡宗（チャクケ）	チヤッケ	Chakke.
次門（ジナンケ）	ズナンキ	Zunanki.
血統（チスヂ）	ツースヾ	Tsūsuzu.
苗裔（シソン）	シソン	Sison
系圖	キーズ	Kīzu.
門地（イエガラ）	イガラ	Igara.
家督（カトク）	カトク	Katoku.
氏（ウチ）	ウヅ	Uzu.
姓（ミャウジ）	シ	Shi.
苗字（ナノリ）	ナノルリィ	Nanoruri.
通称	ヤラビナー	Yarabinā.
分家	バガルリィヤー	Bagarīyā.

第二類

其一　人品ノ上

内地語 Japanese	八重山島語	Yaeyamajima.
老人（ラウジン）	ウイピィト	Wipit.
翁（チヾ）	ウシユマイ	Wshumai.
	［平民ニハ「アボジイ」ト云フ］	
媼（ババ）	ンミ	Nmi.

［平民ニハ「アーパ」ト云フ］

壮年	サカ、リィ、トス	Sakaritosu
青年（ワカキヒト）凡十五	バカトス	Baka-tosu.
若男（ワカキヲトコ）	バガビギドン	Baga-bigidon.
幼婦（ワカキヲンナ）	バガミードン	Baga-mīdon.
美少年即姣童	アッパリファーナマ	Appari-fānama.
美女子	アッパリミートンナー	Appari-mīdon-nā.
兒童（ワラベ）	ヤラビ	Yarabi.
童男	ビギドンファー	Bigidon-fā.
童女	ミードンファー	Mīdon-fā.
子供（コドモ）	ヤラビノメー	Yarabi-no-mē.
小兒	ファーナマ　又	¥Fānama or
	ヤラビーマ	Yarabīma.
赤子（アカゴ）	アカフアーナマ　又	Akafānama or
	アカグ	
乳兒（チヽノミゴ）	ツーノミィファー	
孿兒（フタゴ）	フダグ	
私生兒（カクシゴ）	グンボー　［牛房ノ儀］	
棄子（ステゴ）	シテファー	
長年（トシウエ）	トスウイ	
年下（トシヽタ）	トスヽタ	
同年（ドウネン）	ドウニン　又	
	ピィトヽス　又	
	ピィトッツ	
朋友	ホーユ　又	
	ドス	
親友	クンイドス　又	
	シンユウ	
大男（ヲホヲトコ）	ヲホヾニ	
中男（チュウノヲトコ）	ナカホド	
小男（コヲトコ）	ゴマビキドン	
	［一名］ピビジヤ　［山羊ノ儀］	
大女（オホヲンナ）	ヲホミードン	
中女（チュウノヲンナ）	ナカミードン	
小女（コヲンナ）	ゴマミードン	
長人（セダカ）	タキダカ	
矮人（セビクシ）	シピィク	

肥人（コヘタルヒト）	コイボッタ
瘠人（ヤセタルヒト）	ヨウンガラー　又
	ヤセ
美人	アッパリ　又
	アハリ
美男子（ウツクシキヲトコ）	カイビギドン　又
	テッパナビラーマ　又
	アッパリビギドン
美婦人（ウツクシキヲンナ）	カイメーラビ　又
	天下一　又
	アッパリファー
醜人	ヲッカイシヤーリーイ、ピイト
醜男（ミニクキヲトコ）	ヲッカイビギドン
醜婦（ミニクキヲンナ）	ヲッカイミードン
鰥	ピイトリィモノ　又
	ヤズマリィ
寡	ピイトリィモノ　又
	ヤズマリィ
孤（ミナシゴ）	クズマリイ
獨（ヒトリモノ）	ピイトルリィモノ
盲目	ミツクツア
唖子（ヲシ）	アババ
聾者（ツンボ）	ミントウラー
傴僂（セムシ）	パトンニ　［鳩胸ト云フ儀］
跛人（カタリ）	アイグ　［棒ヲ携ヘルト云フ儀「アイグ」トハ棒ノ事ナリ］
膝行（イザリ）	ツボスアラギイ
アシブト	ウフパン　［大足ノ儀］
癩漢（ライビャウニン）	ライビウー
乞食	モノクヤー
馬鹿	プリモノ
狂人	マーボラー
癲癇	ウスダマ
病人	ビウニン
夛病者	ビウジヤモノ　又
	ヤンプトキ
壮健者	ガンゾウモノ　又　［「ガンゾウ」トハ岩ト云儀］
	達者（タッシャ）

善人	イーピイト　又
	ジンニン
悪人	ヤナピイト
	アクニン
賢人	キンズン　［士族ノミニ限ル平民間ニ此語ナシ］
愚人	グジン　［右同］
仁者	ジンシヤ　［右同］
不仁者	フジンシャ　［右同］
孝行人	コッコズン　［士平共ニ云］
不孝行人	フコウーズン　［右同］
忠人	チヨウズン
不忠人	フチヨウジン
勉強者	マイフナアー
懶惰者（ナマケモノ）	ギフナアー
剛性者（ゴウゼウモノ）	ギイコウーモノ
臆病人（ヲクビヤウニン）	ヲクビヤウニン
正直人	シウーズキイ

（表紙）

八重山列島普通形容詞

海南諸島單語篇

（次次ページ）

形容詞部

沖縄懸下八重山島言單語篇

（次次ページ）

沖縄懸下八重山島單語篇

田代安定　編輯

形容詞

普通形容詞

雑部

内地語	八重山島語	
（一）髙キ	タカキ	Takaki
髙キ岡又髙山	タカモルヽ　又 タカサン	
（二）髙サ	タカサ	Takasa
山ノ髙サヨ	サンノタカソー	
山ノ髙サハ	サンノ、タカサヤ	
髙ク	タカク	
髙々ト	タカータカ	
低キ	ピクサ　又 マラサ	
低キ樹	ピクサ、キ	
低サ	ピクサ　又 マラサ	
此家ノ低サハ		
低ク	マラサ	
低クアル		
低々ト	~~マラサーマラサ~~ピサーピサ	

低々トシタ人		
深キ	フカサ	Fukasa
深キ井	フカ、カー	
深サ	フカサ	
海ノ深サ		
深ク	フカーク	
深ク堀レ		
深々ト	フカーフカ	
フカフカトシタ池		
浅キ	アサ	
アサキ海		
淺サ	アサヽ	
此井ノ淺サヨ		
淺ク	アサ~~ーク~~	
アサク耕セ		
淺々ト	アサーアサ	
アサアサト堀レ		
厚キ		
アツキ板		
厚サ	アッツア	
厚ク	アツーク	
厚々ト	アツーアツ	
薄キ	ピス	
薄サ	ピィスサ　又	
	ウィサ	
薄ク	ピス~~ク~~サ	
薄々ト	ピスーピス	
濃キ	カタ	
濃サ	カタサ	
濃ク	カターク	
濃々ト	カターカタ	
稀キ	~~ピ~~ウゥスサル	
稀サ	アハサ	
稀ク	アハク	
稀々ト	アハクアハク	
大ナル又太キ	~~ウホキ~~ヲッキ　又	
	~~ウプサ~~ウフ　又	

	~~オホキナー~~マイシヤ
大サ又太サ	ウフサ　又
	マイ~~サ~~シャ
大ク又太ク	~~ウホサ又マイクサー？~~マイク
太々ト	マイマイ
小キ又細キ又小サナル	ゴマサ
小サ	~~イミーメ~~ゴマサル
小ク	ゴマ~~サ~~ク
小々ト	ゴーマーゴマ
長キ	ナガ
長サ	ナーサ
長ク	ナーナ
長々ト	ナガーナガ
短キ	インツカサル　又
	~~ツカサ~~
短サ	同インツカサ
短ク	イツカサ
短々ト	イツカサイツカサ
白キ	スソサル
白サ	スソサ
白ク	スソースソー
	~~シルク~~スソーサスソースソー
白々ト	スソースソ
	~~スソースソ~~
黄色ノ	ク~~ォル~~ズゥンイルノ
黄サ	クズゥイルサ
黄ク	~~クイルサ~~クズゥンクズゥン
黄々ト	クズゥインクズゥイン　　Kzuin-Kzuin[13]
黒キ	ファヲ
黒色ノ	ファヲイルノ
黒ク	ファヲーフォ
黒々ト	ファヲファヲ
赤キ	アカ
赤色ノ	アカイルノ
赤サ	アカサ

[13] このローマ字表記は kᶻɨɴ.kᶻɨɴ のような音声的実現を示唆している。

赤ク	アカク
赤々ト	アカーアッカ**ー**
青キ	アウ
青色ノ	アウイルノ
青サ	アウーサ
青ク	アウク
青々ト	アウーアウ
清キ	キリー　又
	カイシャル
清サ	キリー　又
	カイシヤ
清ク	キリー
美キ	~~チコラサ~~リッパ　又
	カイ~~サ~~シャ
美ク	ミグト　又
	~~チウラク~~リッパ
酸キ	スーサル
酸サ	スーサ
酸ク	スーサ
甜キ	アマサル
甜サ	アマサ
甜ク	アマ~~ク~~サ
辛キ	カラサール
辛サ	カラサ
辛ク	カラ~~ク~~サ
苦キ	ンガサ―ル
苦サ	ンガサ**ー**
苦ク	ンガ~~ク~~サ　又
	ンガーンガ
鹹キ	~~サク~~スーカラサル
カラサ	~~サク~~スーカラサ~~ル~~
カラク	~~サクラ~~スーカラサ
香バシキ	カバサル　又
	イーネウイ
香サ	カバサ
香シク	カバ~~シク~~サ　又
	イーネウイ

臭キ	フサヽル
臭サ	フサヽ
臭ク	フサク
腥キ	ナマフサヽ
ナマグサヽ	ナマフサヽ
ナマグサク	ナマフサヽ
ケブキ	キフスッサル
ケブタサ	キフッスサ
ケブタク	キフスゥサ
眩ユキ	ミープトルサル
マバユサ	ミープトルサ
マバユク	同上
愛ラシキ	カナ~~シ~~サールヽ　又 アツタラサール
カハイラサ	カナサ　又 アツタラサ
カハイラシク	カナ~~シク~~サ　又 アツタラサ
睦キ	ムツマサル
ムツマシサ	ムツマサ　又 イーナカ
ムツマシク	ムツマ~~シク~~サル
心易キ	ドーヤッサ
ヨキ	~~ミシヤン~~イー
悪キ	ヤ~~ニシャ~~ナ　又 ~~ヤナモノ~~
面白キ	ウムッサ
嬉（ウレシ）キ	サニッシヤ　又 ウリッシヤ
辱キ	プコーラサ
難有キ	~~フ゜ コーラサ~~　~~プコー~~ニハイ［中等］　又　［一般］ スデカホー　［上等］
快キ	イーコヽツ
稀少ナル	マレナルモノ
憐レナル	アハレナモノ　又 ~~チ~~クズゥモング~~ルサ~~リシャール
残念ナル	ザンネンナモ　又

	クオズゥタネーモノ
悲シキ	カナシイ
氣ノ毒ナル	~~ドーグルサ~~ドーングリシヤ
四カクキ	スカク　又
	スボウユカド
円キ	マルキ　又
	モルモノ
廣サ	ピソサ
狭サ	シバサ
尖タル	トガリ
曲タル	マガルモノ
直ナル	マスヽクナル
同ジキ	ヨノモノ
同シカラサル	ネユンモノ
似タル	ネヤールモノ
似ザル	ネユシモノ[14]
中程ノ	ナカゴルノ
軽キ	カルサ
重キ	ンブサル
**　重キ物**	ンブサルモノ
別ナル	ビツモノ
常ノ	ツニノ
肥タル	パンタル　又
	クワイタル
瘠タル	ヤシタル　又
	ヤーウガリタル
髙價ナル	タカダイ
下直ナル	ヤスダイ
誠ノ	マクトノ
詐リノ	イツワリノ　又
	ユクレモノ
立派ナル	デッパ　又
	ミグト　又
	カイシヤ
丁寧ナル	テーニーナル

[14] 「ネユシ」と書かれているようだが、「ネユン」の間違いである。

深切ナル	シンヂツナル
不敬ナル	ツヽスメ、ネンモノ　又
	ボリーナモノ
情ノアル	ジヨウアル　又
	ナサキノモノ
情ノナキ	ジヨウネンモノ
強キ	ヅウサ
弱キ	ユウサ
柔カナル	ヤハラサナル
粗末ナル	ヤナモノ　又
	ソマツナモノ
アラキ	アラサ
脆キ	サパサ
硬キ	ゴーッサ
堅キ	カタサ
平 ⁇ ナル	
古キ	ホルキ
新シキ	ミーモノ　又
	ミーサールモノ
意地ノ悪キ	ヤナクンジヨウ
キタナキ	クイタナサ　又
	ヤナー
忽体ナキ	
可笑キ	ヲカシモノ
**　ヲカシキモノ**	バラウモノ
不思議ナル	ピルマシーモノ
珍シキ	シズラシーナル
異様ナル（イフウ）	イフーナ
恠シキ	アヤスサルモノ
餘議ナキ	ユンドクルナヘ
眠サ	ネビープサヲ

参考文献

石垣實佳 (2013)『メーラムニ用語便覧』南山舎.

加治工真市 (1998)「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学: 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』10，265–320.

加治工真市 (2020)『鳩間方言辞典』国立国語研究所.

國吉まこも (2012)「1885 年田代安定の八重山調査と沖縄県の尖閣諸島調査」『地域研究』(10)，11–24.

齊藤郁子 (2006)「田代安定の学問と資料」『沖縄文化研究』(32)，275–322.

セリック・ケナン、麻生玲子、中澤光平、中川奈津子 (2021)「川平方言語彙集」『川平村の歴史』川平公民館 pp. 410–439.

田代安定 (1888)「沖縄懸下宮古島及沖縄島對譯方言集」『東京人類學會雑誌』3 (29)，323–328.

田代安定 (1894)「八重山群島住民ノ言語及ヒ崇教」『東京人類學會雑誌』9 (96)，229–232.

中生勝美 (2011)「田代安定伝序説–人類学前史としての応用博物学」『現代史研究』(7), 129–164.

中川奈津子、セリック・ケナン (2020)「南琉球八重山語白保方言の語彙リスト：名詞を中心に」『琉球の方言』44，283–306.

仲原穣 (2004)「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学: 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』16，259–287.

名越護 (2017)『田代安定: 南島植物学、民俗学の泰斗』南方新社.

西岡敏 (2000)「石垣島北部方言の体言基礎語彙」『琉球の方言』(24)，37–56.

平山輝男 (1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社.

平山輝男 (1988)『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社.

前大用安 (2002)『西表方言集』前大用安.

三木健 (1980)『八重山近代民衆史』三一書房.

宮城信勇 (2003)『石垣方言辞典』沖縄タイムス社.

宮良当壮 (1930)『八重山語彙: 附八重山語總説』東洋文庫叢刊 (第 2) 東洋文庫.

与那国方言辞典編集委員会 (2019)『どぅなんむぬい辞典』与那国町役場.

受理日 2021 **年** 4 **月** 13 **日**